

「我が人生思い残すことなし」(後編)

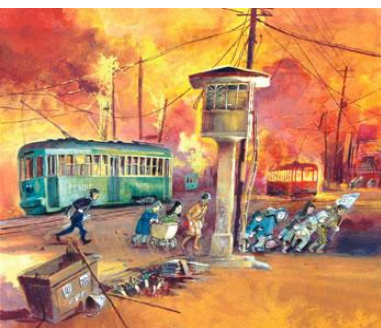
きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = 雄大となるかは、父大志が失踪した年の夏、祖父母の居る神戸の実家で過ごしていた。そこでは父のかつての出来事や生活の様子を祖父母から聞かされ、そこでは父のかつての出来事や生活の様子を祖父母から聞かされ、その想いを肌で感じ取っていた。 =

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

7. 広島

「間もなく広島に到着致します。」新幹線の車内に自動音声のアナウンスが流れた。大志の父昭男と美子は、孫の雄大とはるかと一緒に昭男の母きみの生まれ故郷である広島に来ていた。「さあ、降りる用意しいや。」「忘れもんないか。」昭男が皆にせかすように言った。「ここ出たらもう九州まで止まらへんしな。」今度は少しおどかすように言った今朝5時に起きて、慌ただしく出掛けて来た雄大とはるかは居眠りから目覚めて、まだ寝ぼけた様子でリュックを背負った。「さあ足元注意して。」美子が優しく声を掛けた。一行はまっすぐ改札を抜け、駅舎の外にでるとムツとする空気に全身を包まれた。「朝からもう30℃越してるで、これは。」昭男がたまらず声を上げた。「雄大、はるか、50年前の夏もこんな暑い朝やった。後ろのあの時計見てみ。」昭男は、駅舎に掲げられた大きな壁時計を指さした。「今8時10分や、今から5分後に一発の爆弾がこの街全てを灰にした。人も木も家も、道路も橋も一瞬にな。それが原子爆弾や。」雄大とはるかはようやく目覚めた様子で耳を傾け、街と行き交う人々を見つめていた。美子は無言で視線を下に向けていた。「ほな、行こうか。」昭男は皆に促がした。「これからどこ行くの？」はるかが、おもむろに聞いた。「原爆ドームや。」昭男が答えると、「原爆ドームって何？」とすぐさま次の質問が来た。「原爆ドームはな、原爆に焼かれた建物の跡や、世界遺産やで。」今度は雄大が答えた。「雄大は何でもよう知ってんな。」美子がほめると、「いや、それ程でも・・・。」「お兄ちゃん照れたあ。」「あはははっ。」皆一斉に笑い出した。「ほな歩こか。」昭男が先を行った。「おじいちゃん市電走ってるのに乗らないの？」今度は雄大が質問した。「市電にはいやな思い出があるさかいに乗りたくないねん。」昭男がちょっとムキになって答えると「おじいちゃん、戦争中に市電に乗ってて空襲に合わはってん。」美子が説明した。「空襲って何？」はるかがすぐに尋ねた。「空襲ってのは空から飛行機で爆弾落とすことやで」また雄大が答えた。



「すごいな雄大は、その通りや。それでももう少しで死る所やったんで、おじいちゃん市電が怖わあて乗れん様になってしまわはってん。」「ふ〜ん。」「もしおじいちゃんその時死んでいたら僕らは生まれてなかった言う事やな。」雄大が感慨深げに言った。「そうやでえ。しやあから今生きてるいう事をありがた思わなあかんねんで。」美子が言い聞かす様に言った。「分かってる。」雄大が強く答えた。

「すごいな雄大は、その通りや。それでももう少しで死る所やったんで、おじいちゃん市電が怖わあて乗れん様になってしまわはってん。」「ふ〜ん。」「もしおじいちゃんその時死んでいたら僕らは生まれてなかった言う事やな。」雄大が感慨深げに言った。「そうやでえ。しやあから今生きてるいう事をありがた思わなあかんねんで。」美子が言い聞かす様に言った。「分かってる。」雄大が強く答えた。

(つづく)